

円徳寺『教行信証に学ぶ会』 第六回（令和二年十月）

講師 延塚知道先生

《一席》

はじめに

こんにちは。雨の中をお出かけいただきまして大変ありがとうございます。ございます。コロナでほとんど中止になりました、中止でないのは田畑先生くらいで、お話させていただくのは大変嬉しく思います。ほとんど毎日のように出ておりましたので、じつとしてると体調がおかしくなります。けれども一生懸命今の間にと書いて本を書いています。

皆さんご存知ですかね、大谷専修学院の中川皓三郎先生がお亡くなりになりました（2020年十月二十日命終、行年七十八歳）。私の五つ上の先輩でした。平野修先生と同級生で、平野先生と中川先生は同じ大乘仏教の仏教学のゼミの博士課程におられました。私は5歳下ですから、まだ学部で勉強してたけれども、その頃はお二人とも雲の上の人でした。金がなくて貧乏で、中川さんはダメージジーンズというのをずっとはいていました。それからバンドがないから、そのへんで拾ってきた藁で編んだ縄を結んで禅宗の坊さんみたいな恰好をしていました。まあ金がなかったんです。いつも寒いから、平野先生と中川先生と、毛布をかぶって火鉢に当たりながら、お二人でサンスクリットの勉強をよくしておられました。

平野先生はずっと大谷大学でしたけども、中川先生は金沢大学から大学院に来られたものですから、サンスクリットができなかったのです。だからいつも平野先生に教えてもらっていました。僕はそ

こに行つて、じつと勉強が終わるまで待つていて、それから三人で親鸞聖人の勉強をしたわけです。ですからお二人とも僕にとつては学生時代の恩人で、大先輩で、大先生です。ところが二人とも亡くなられてしまったのです。なんという寂しい気持ちでいっぱい。ですから生きている間に、一生懸命に仕事をしようと思つて、本を書いています。

皆さんは私の本を書くのは学者だから、勉強したことを書いているのだから、大したことはないと思つておられるかもしれませんが、難しいんです。七高僧の和讃でしょう。そうすると七高僧を一人ずつ、例えば龍樹菩薩から始まりますね、そうすると親鸞聖人がどういう龍樹菩薩を仰いだのか、これは大問題です。ふつう曇鸞大師が引用する「易行品」。それだけを持つてくるでしょう。『十住毘婆沙論』をお書きになった龍樹菩薩、これを宗祖は大乘仏教の初祖として仰いでいる。その時に親鸞聖人には、はっきり「龍樹菩薩はここを教えてくださいましたのだ」という感動があったはず。そのことを七高僧、お一人お一人、きちつと確かめないと七祖の書物は読めません。だけど今まで言葉の解釈ばかりしてきている。

そしてこれまでの勉強ははつきり申し上げますけども、宗祖がお決めたこととは末学が詮索したらいけないと。分かりますね、「七祖」と親鸞聖人が決めたのだから、それをありがたいただけばいいと。全部そうです。『教行信証』も教・行・信・証という本をなぜ書いたのか、それは問うてはいけないと。宗祖がお書きになったのだから、ありがたいただけばいいと。こういう姿勢でこれまで勉強してきたわけです。

そんなことは学問にはなりません。「鵜呑みにしてそこから考えろ」なんていうのは、まったく学問にならない。なぜ『教行信証』を

書いたのか、なぜ教の巻、行の巻、信の巻、証の巻、あんな変な、変なと言ったら変ですけど、大乘仏教の論書としては実に不思議な本です。なぜあんな本を書こうとしたのか。

しかも自分のご意見はほとんど書いてなくて、全部「文類」という形をとるでしょう。なぜか。それが分からなければ『教行信証』を読めるはずがありません。それと同じように七祖もそれぞれに親鸞聖人が役割を担わして、そして自分が徹底的に教えられたことを中心に七祖を選定しているわけです。それが分からなければ七祖を読んだことにならないわけです。だから苦しいですよ。今までの参考書はどれもそんなことは書いてないのだから、必死で考えて、寝られません。

特に道綽、源信という方たちは七祖の中でも分かりにくい。それは今始まったわけじゃないですよ。もう五十年来の問いです。ずっと考え続けているんですけど、なかなか解けない。そうすると夜寝れなくて体調も悪いし……、

田畑先生の真似をして僕も木の剪定をしていた。そうしたらドタツと落ちて、ここをゴーン打って、折れとるわけでもないのにと思つて、もう一年前ですよ。それが未だに治らずに疼くんです、痛くて。この間からもう痛くて痛くて寝れんし、もうこれはどうなるやろうと思つていたら、遂十日ほど前ですかね、源信が分かったのですよ。「そうだ！」と。そしたらすつと治りました(笑)。ほんとですよ、嘘じゃない。体中痛かったのにどうなったんやろう。まだ中の方が多少痛いですが。けど、ずくずく疼いたりすることは無くなりました。不思議なものやなあと思つてね、

ずっとそんなことを考え続けているから、「そうだ！」と腹に落ちたら、どんなに嬉しいか。もうこれで次の四巻目(『高僧和讃講義

(四)―源信・源空―)が書けます。今一生懸命に書いてるところです。

そんな日常です。まあ皆さん、このコロナの間に勉強してください。本読めるでしょ。読んでも忘れるかもしれない。忘れてもいいのよ。何遍も読んでも身に付く。だから暗記するほど読めば身に付きますからね、だからそれが大事なのです。

総序

皆さんと今一緒に『教行信証』の「総序」というところを読んでいます。この総序というところは、この間申しあげたように、親鸞聖人がちゃんと「序」と書いて、そしてご自分のフルネームをちゃんと書いてあるわけですから、『教行信証』全体をまとめた序になるわけです。それだけに、この『教行信証』の総序は、詳しく読むと『教行信証』の各巻に展開していくことになる。だからそこまで詳しくここで読んでも分かりにくいと思つて、大切なところだけをピックアップして、今、皆さんと一緒に拝読しているところです。まず最初に一度大きな声を出して読んでみてください。

顯浄土真実教行証文類序

竊かに以みれば、難思の弘誓は難度海を度する大船、無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり。しかればすなわち、浄邦縁熟して、調達、闍世をして逆害を興ぜしむ。浄業機彰れて、釈迦、韋提をして安養を選ばしめたまえり。これすなわち権化の仁、斉しく苦悩の群萌を救済し、世雄の悲、正しく逆謗闍提を恵まんと欲す。かるがゆえに知りぬ。円融至徳の嘉号は、悪を転じて徳を成す正智、難信金剛の信樂は、疑いを除き証を獲しむる真理なりと。しかれば、凡小

修し易き真教、愚鈍往き易き捷徑なり。大聖一代の教、この徳海にしくなし。穢を捨て浄を欣い、行に迷い信に惑い、心昏く識寡なく、悪重く障多きもの、特に如来の発遣を仰ぎ、必ず最勝の直道に帰して、専らこの行に奉え、ただこの信を崇めよ。

ああ、弘誓の強縁、多生にも値いがたく、真実の浄信、億劫にも獲がたし。たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ。もしまたこのたび疑網に覆蔽せられれば、かえつてまた曠劫を徑歴せん。誠なるかなや、撰取不捨の真言、超世希有の正法、聞思して遲慮することなかれ。ここに愚禿積の親鸞、慶ばしいかな、西蕃・月支の聖典、東夏・日域の師積、遇いがたくして今遇うことを得たり。聞きがたくしてすでに聞くことを得たり。真宗の教行証を敬信して、特に如来の恩徳の深きことを知りぬ。ここをもつて、聞くところを慶び、獲るところを嘆ずるなりと。〔『教行信証』総序、聖典149〜150頁〕

これだけが「総序」と言われる序ですが、文章も格調が高いし、『教行信証』の内容を裏に見事にまとめられているというふうに思えます。それでここを読む時に分かりやすいように二つに切りました。

「穢を捨て浄を欣い、行に迷い信に惑い、心昏く識寡なく、悪重く障多きもの、特に如来の発遣を仰ぎ、必ず最勝の直道に帰して、専らこの行に奉え、ただこの信を崇めよ。」ここまでが前半でしたね。「ああ、弘誓の強縁…」というところが後半になります。

『大経』の信心の表明

大体前半のことについてはお話をしていたかと思えます。まず、最初に「竊かに以みれば」から始まりますけれども、ここは『大経』（『大無量寿経』）ですね、親鸞聖人がお立ちになった『大経』の信心

の表明、それから始まります。ですから、「自分のような凡夫が仏様の世界をおもんみることは誠におこがましいけれども、頂いた他力の信心、これこそ如来のはたらきなのだ」。こういう意味ですね。ですから「自分の信心の意味をよく考えてみると、渡りがたい、思いがたい、私たちの分別をはるかに超えて広い本願のはたらきが、私たちの渡りにくいこの世の中を渡してくれる大きな船である」

もうひとつは、「無碍の光明は、仏様の智慧の光は、私のような自分分が」という根性が抜けない、そこからしか物が見えていない、そういう闇を破って仏様の世界に解放して下さる大きな智慧である」。

こういうふうに『大経』の信心が表明された。はっきり言えば、「信心こそ如来である」。私たちの分別で考えると、そんな馬鹿なことがあるか、と思われるかもしれませんが、「信心こそ、実は如来そのもののはたらきなのだ」。こう言ってるわけです。まあこれは大変大事なところですよ。

「凡夫の仏教」とか「浄土真宗」というと、「凡夫だ、凡夫だ」というところを強調して、そして、その他の仏教が言うように、仏様の悟りを覚れないのだと、だから浄土に命終わって生まれて、浄土で悟りを開くのだと、こういうふうに一応解釈されます。

しかし、この世で、今、皆さん一人一人のところに、仏様の悟りの世界が開かれなければ仏教にはなりません。聖道門は「悟りを覚る」と言います。「凡夫は悟りを覚ることはできない」、確かにそうです。しかし頂いた他力の信心のところに、如来そのもののはたらきがあふれ出して、いいとか悪いとか分別に悩む、そういうものを突破して、私たちが大きな仏様の世界に生かされていくものに翻されていくこと。それが信心でしょう。

ですから、この前半が「一心帰命」。仏様のいのちに五体投地して、頭を下げ、初めてこの世を超えた仏様の世界に目を開いた。この感動を「一心帰命」といいます。分かりますね。回心と言ってもいい。如来の方から仏様の世界を開こうとして、「南無阿弥陀仏」として私たちのところにまで来てくださったっている教え。仏様の方から言えば回向です。けれどもその回向をいただく私たちの方から言えば回心です。回心と回向は同じことを言っている。

そして、『大経』の「世を超える」という、これが初めて私たちのような凡夫のところに開かれてきたのだ。こういう感動。

大宝海―真実一如の世界

前にも読んだかもしれませんが、ここは大切なところですから、『一念多念文意』を開けてみましょう。聖典を持っている方は五百四十三ページになります。最初から四行目のところに大切な言葉があります。

「**真実功德ともうすは、名号なり**」。南無阿弥陀仏の名号ですね。名号はおまじないとか、私たちの願い事をするときの道具とかではなくて、如来の**真実功德の世界を開いてくださるのだ**、こういう意味です。ですから、「**真実功德ともうすは名号なり**」。**一実真如の妙理、円満せるがゆえに、大宝海にたとえたまうなり**」。名号が仏様の世界を開いて、「**一実真如**」、(素晴らしい言葉でしょう)。これは私たちの分別を超えて、どんな人も一乗、平等である。比べるということを超えた平等の世界、そして真理の世界、そこに凡夫のまんままで目を開く。「**円満せるがゆえに**」、円満してる。凡夫のまま、仏様の比べる必要のない真理の世界を名号が開いてくださる。そしてそれを「**大宝海**」大いなる宝の海に譬えるのだと。

「**一実真如ともうすは、無上大涅槃なり**」。涅槃の世界なのだ。「**涅槃すなわち法性なり**」。法性すなわち如来なり」。分かりますね。名号が如来の世界を開くのだ。真実一如の平等の世界を開くのだ。

「**宝海**」、宝の海、「**ともうすは、よろずの衆生をきらわず、さわりなく、へだてず、みちびきたまうを、大海のみずのへだてなきにたとえたまえるなり**」。分かりますね。ここは浄土真宗以外の仏教ですと、「悟りを開いた」と言うところですよ。そうですね、仏様の世界が、今私を包んで開かれたのだと。初めて「世を超える」という体験を持ったのだと。だから聖道門の言葉で言えば、「悟りを開いたのだ」と言ってもいいような同じ感動が書かれている。それを、悟りを開いたという言葉はどこにも出て来ないね。そして譬えとして、海のようにだと、大きな海のような一如の世界に私たちがいるということがはつきり分かったのだと。こうおっしゃっているでしょう。これが他力の仏教、凡夫の仏教の悟りの表現だと思ってください。悟ったとは言えない。けれども、分別を尽くして、分別を尽くして、どうにもならん。

地獄を見た人―落ちるところまで落ちてみよ

今朝、目が覚めて「**エール**」(NHK連続テレビ小説)を見たのですよ。皆さんも見てるでしょう(笑)。顔を見たら大体わかる。あのお医者さん(永井隆博士)は偉いね。長崎の原爆で倒れた人たちに一生懸命看病して、そして自分も白血病になって死んでいく。地獄を見たのですよね。その方が「**長崎の鐘**」の脚本を書いて、そして古関裕而さんに歌を作ってほしいと言う。そしたら古関裕而さんは真面目だから「**一回先生にお会いしたい**」と、東京から長崎まで会いに行く。そうすると先生は白血病でもうよれよれになって、寝たまん

までしたけども、「まあよう来られたね」と言う。古閑裕而さんは「自分の歌の影響で若い人たちが戦争に行つてみんな死んでしまったから、自分はもう歌が書けないのです」と言う。先生は「ああ」と言つて、「まあ、落ちるところまで落ちなさい」と言つたでしょう。その通り言いましたよね。「落ちるところまで落ちなさい」と。そうなのです。

そしたら古閑裕而さんは、(まるで若い時の僕みたいですよ) ふさぎこんで三日間部屋から出て来ない。要するに自分のことを一生懸命突き詰めていこうとしているわけです。そしたら先生がそれを聞いて「うん、あの人は真面目な人やね。自分の中をさがしてもないのだからね」と言われたでしょう。そうなのです。地獄は外にあるでしょ、見たらわかる。だけど、外にあることが自分の中のことなのです。自分の中のことを考えていると、私みたいに暗くなつてうつ病になるのです。その中にあるどろどろしたものが原爆として外に出てるわけです。

先生は一生懸命看病しながら地獄を這いずり回つてきたわけです。そしてその中でたぶん涙を流しながら、「もういやだ」と。なんと言いか、自分のいのちの一番深いところから「もう戦争はだめだ」と叫んでいる声が聞こえたのでしょね。そういう「命の底から湧きあがつてくるような意欲に目覚めなさい」「何を甘えたことを言うとのや」と、お医者さんはきつと言いたかつたのでしょね。偉いなと思ひましたよ。

そうです。上を見て悟りを覚るといふのではなくて、この現実を見ると地獄なんだと。人間の頭ではもう解けない。だけど、その中で「いやだ」と、「もう何とかしてくれ」と叫んでいる祈りがどなた

の中にもありますよね。おそらく死んでいった方々も、みんな死んでいくなんて思つてないから必死に生きようとしたのでしょ。そこに、命の叫びを聞き取つて、何とかして助けたいと思つて一生懸命やつてきたのだけど、自分の力が及ばなかつた。まあ地獄としか言いようがない。なんで人間はこういうことをするのだと思ひながら、自分の中から湧き上がってくる、(何とかいうか、分かりますよね)、もうみんな平等なのだ、男も女もない、そして戦争はだめだと戦争がだめだから平和だと言つているのじゃなくて、平和とか戦争とかということを超えて、地獄の底から命が叫んでいる声に目覚めなさいと。それは現実をよく見れば分かるでしょと。多分そうおつしやつているのだらうと思ひますよ。

親鸞聖人はそういう世界を生きてきたのです。人間の頭ではもう解けない問題にぶつかつてもがきながら、「いのちみな生きらるべし、平等でありたい」、そういう命からの深い促しの中に実は仏様の世界があるのだということ、宗祖は初めて表現してきたのだと思ひます。命の本当の願い、実はそこに私たちの地獄を超えて生きて行くような大きな世界を仏様の方が開いてくださる。それに目覚めなさい。こういう事を宗祖は言つていられるわけです。

だから、地獄を這いずり回つて仏様の促しの声に目覚めた者は、その仏様の世界に平等の一如の世界があつて、そして私たちの考えるということを超えて、初めから実は仏様の世界にあつたのだと。それをいつの間にか自我意識に縛られた人間になつて、自分を絶対に譲らない。そういう考えの中でしか生きて行けない人間は、実は初めから一如の中にあつた。そして大きな世界に目を開くから、「大宝海」、海のような大きな悟りの世界に私は目を開かれたのですと。

これが信心の持つ智慧です。

分かりますね。ですから「覚った」と言っている訳ではないけれども、人間のいのちの根源から促し続けている本願のはたらきの中に如来の世界がある。私たちの分別を超えた世界がある。そしてそれは事実として、今ここにあるのだと。海のようにみんなその中にあるのだと。気が付かないだけです。死ぬとき分かります。帰って行くから。いやあ、申しあげていること分かりますよね。

後世に伝えるべきもの―仏の教え

ちよつと横道に逸れちゃたら田畑先生に怒られちゃうけども、この間、NHKのテレビが来ましてね、そして、私の所のトンネルの爆発の事故（二又トンネル爆発事故：一九四五年十一月十二日）を取材して、一つにまとめて何か表現するらしい。だからこの間からうるさいのです。インタビュ―させてくれとか、たびたび来るのです。可愛らしいきれいなお嬢ちゃんね、まあどうでもいいんですけど…（笑）。

昨日おとといですか、私の寺の本堂に事故の当時の生々しい写真が掛かっているものですから、その写真の前で、その写真の説明をしてください、と言うのです。そしてそれが終わったら、今度は慰霊塔の方に行つて、慰霊塔の説明をしてください、と言う。面白くないでしょう、と思いつながら、しかし、まあお嬢ちゃんがそう言うのだから一生懸命解説をしていたのだけど、「これで何をする気なんや」とやつぱり思う。

それで慰霊塔のところに行つた時に、マイクが入っていたけど、「君、このテレビでどんなことを訴えたいの？」と聞いたら、「戦後七十五年経つて、こういう事故があったということを忘れないように、

みんなにやつぱり伝えたいのです」ということでした。最近テレビにそういう趣旨の解説をする場面がよくありますね。原爆の物を集めたり、戦争のものを集めたりしてね、そして後世に伝えて、原爆が悲惨だということを知つてほしいというわけですよ。

「確かに、君が言うのは大事なことも知れない。あなたは人間としてやらなければならぬことをやる。それはよく分かる。だからそれを否定するわけじゃない。それは立派なことなのだけでも、しかしよう考えてごらん、ここで事故があつて七十五年経つと、事故に遭つた当時の人たちはもう三〇四人しかいない。ご家族、遺族と言つても、その当時のことは忘れるわね」と言つたら、「は？」みたいな顔しとつた。（笑）

「この慰霊塔というのは何なのですか？」と言うから、

「慰霊塔というのは、霊を慰めると書いとるからね、本当は真宗的ではありません。真宗の寺にそういうものがあるというのはおかしいじゃないかと言われるかもしれん。けれども、これは亡くなった方たちのひとつの象徴なんだ。遺族の方たちはなにも霊を慰めるためにここに来たのではない。みんな聞法しに来たのだ。」と言つたら、「ほー」みたいな顔しとつた。

そうでしょう。なんで戦争から帰つてきた人たちが、すぐに死んでいかなくはならんのかね。なんでこんな目に遭わないかのか。しかも、三年も四年も泥を掃き出して、一生懸命泥まみれに生きてね、そして自殺してしまいたいと思うけれど、子供が泣くから出来なかつたんだ。そんな人ばかりじゃないですか。そういう人たちがここに来て親鸞聖人の教えを聞いたんだ。

そして、こんなふうにして亡くなったというのは事実だから、そ

こからやつぱり立ち上がっていかなきゃならんと思うて、親鸞聖人の教えを聞きながら、たくさんの人たちが勇気を貰って立ち上がって生きてきたんだ。だからここで生きてきたばあちゃんたち、じいちゃんたち、みんな偉かった。僕はそれに育てられたから坊主になつたんだと、だいぶん言うたんです。

「二千五百年の歴史の中で戦争が止まったためしがないじゃないか、いくらこんなものを見せてもね。その中で戦争を越えて生きていくという人たちが、仏教の教えによって立ち上がっていった。そこに戦争を越えるという証拠があるじゃないか。その教えの方に目を向けないで、こんなものばかり紹介して、それが何になるか。」と怒つたんですよ。そしたら、シュンとしてました。

「確かに戦争を後世に伝えていくことは大切かも知らん。しかし、それを乗り越えていくような教えがある。それに目を向ける方が根本的じゃないかね」と言つたら、「はい」と。

「仏教というのは単なる宗派とかそんなじゃないんだ。二千五百年の歴史があつて、そうやって傷ついた人たちが、そこから生きていく勇気を貰った。そこに戦争とか平和とかいうことを越えていくような道がある。そもそも戦争を越えるということは、今の人類の課題でじゃないかね」と言つたら、「そうです」と。

「それを解く教えがあるというのだったら、そっちの方が根本的だろう。」と言つたら「いや、おっしゃるとおりです。ですから、今回のテレビはそれを忘れないようにしてやります」と言うから、「おお、やつたらいいけど、僕がこういうことを言つてるといことを、どこかちよつとでも入れとけよ」と言つた。全部カットするからね。まあどうするか知りませんが。(笑)

「報恩講ってどんな字を書くのですか？」と言うから、「大変失礼だけど、君らは教養がない」と。今度、また報恩講(毎年十一月十二日)の時に撮りに来るらしいけどね、まあ、可愛らしいお嬢ちゃんだから「よく、頑張っておられますね」、としか言いようがないけどね。年取つたせいかな、「解説ばかりして、これをどうする気?」「そんなことじゃないでしょう」そういうことを言いたくなつてくるわけですよ。今のマスコミの人たちはそういう人が多いんだ。すみません愚痴ばかり言つて。

この間も新聞記者が来て、「ここはこういう事故があつて、ずうつとそういうところで何十年もやってきたんだから、あなたは平和教育をしているのでしょうね」と言うのです。男の新聞記者です。それは汚い男やつたから腹たつてね(笑)、「お前何を言うか、ここは戦争と平和という相反する発想が間に合わない人たちが生きてきたんだ。そんなことで解決が着くか。戦争と平和、そんなことが間に合わないから、この人生どうするんだと言つて泣いてきた人たちが居るんだ。戦争と言え、すぐに「平和教育してきたんですか」と言う。お前、この人たちに失礼だ、馬鹿もん！」と言つたら、怒つて帰りましたけどね。(笑)

すみません、申し上げていること分かりますよね。「どんなことがあつてもいのちの促すままに自分のいのちを尽くしていこう、それが私の本願なんだ」と言つて立ち上がつていった人たちがいる。そういうふうにして生きていった人たちがいる。その本願は、戦争と平和というような相対的なものを超えて、「みんな平等に促している、みんな仏様の世界は一如の世界として、海のように、みんなを収めているのだ」と。こういう親鸞聖人の素晴らしいお言葉が残っているでしょ。

総序の前半の内容

私がいつも言うように、「一心帰命」というときに、初めて仏様の世界に目を開いた。それを「悟りを覚った」と言わず、それこそ地獄をなめた中から仏様のいのちが促して来て、「いのちの促すように最後まで生きて全うしよう、それが私の本願なんだ」と頷いていった親鸞聖人のお言葉がある、というふうに思います。

『大経』によつて「超世」、「世を超える」という世界を表現すると、次に、今度は

『観経』によつて、「そういう世界を開くのは凡夫なのだ」ということを明らかにされていきます。しかも、言葉が過ぎて大変申し訳ないけれども、堤婆達多、阿闍世。堤婆達多はお釈迦様を殺そうとした人です。それから阿闍世は自分の父親を殺した人です。なんでか分からんけど、縁がもよおして、そういうところに投げ出されて、それこそ地獄をなめた人たちやね。だけど阿闍世はそれを悔やんで悔やんで、体中ひびが割れて膿が出てきた。だけどその悔やんで悔やんで、そうなっている阿闍世に、お釈迦様は、「その悔やんでいるところに仏様のいのちが生きとるんですよ」と言つて、悔やんでいる心を抜き出して、そしてそのもとを尋ねていつて、『涅槃経』では、「それこそが仏性なんだ、如来の心なんだ」というふうに導いていくわけです。分かりますね。そんなふうに立派な修行者となつて悟りを覚めるのではなくて、凡夫として、「逆謗闡提を恵む」、それが『観経』の教えているところです。そして、

『阿弥陀経』で「念仏は悪を転じて徳を成す正智」、普通は、善いものがあるれば悪いものを排除する、こういうことになります。ところが

が悪そのまま、罪を犯した苦しみをそのままを転じてくださる。そこに「本願の名号」の最も大切な意味があるのだ。

そういうことを親鸞聖人が表明しているのが前半になります。これまで勉強してきたところですね。

親鸞聖人の姿勢―経典に返して感動を述べる

ですから、『大経』『観経』『阿弥陀経』というふうに出てきますが、これは「三誓偈」で言えば「我建超世願：普濟諸貧苦」、凡夫こそが救われていく、そして『阿弥陀経』のところでは、凡夫を救うのは如来の方から与えた名号しかない、名号の救い。「名声超十方」。こんなふうに「三誓偈」（重誓偈）は『大経』に説かれるお釈迦様の説法です。だから自分の感覚を言っているわけじゃない。

『教行信証』は親鸞聖人の感動がもとになっています。しかし、それをそのまま書きつけているのではなくて、必ずお釈迦様の教えに返して、「お釈迦様はこう説いているでしょう」と。だからこれだけを選んで、そしてここに挙げてあるわけです。詳しく読むと、親鸞聖人という人は大変準備周到というか、全部『大経』に返して述べておられる。そこが大事です。自分の感動を述べているんじゃない。

例えば皆さんがよく知っているのだつたら「悲歎述懐」というのがあるでしょう。「悲しきかな、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑す」。あれは自分の感情、自分の悲歎を述べている文章として出て来ます。あれは全部「三毒五悪段」にある言葉、内容になっています。それから「後序」に「主上臣下、法に背き義に違し、忿を成し怨みを結んで承元の法難が起こった」と書いています。あれを讀むと、承元の法難に対して腹をたてて書いてるように読

めるでしょう。あれは全部「三毒五悪段」にある言葉です。

「經典にちゃんとこう説いているでしょう」というふうには、「親鸞聖人は必ず經典に帰って言う」ということを知つていてください。そこに親鸞聖人のすごいところがある。親鸞聖人の学問と言つても、自分の意見を言つとるんじゃない。もちろん感動はあつても、それをもう一度『大経』のところで確かめて、そして、ここで「信心」を述べ、その信心を起す「凡夫の自覚」、そして「本願の名号」を述べておられる。

そしてこの「一心帰命」のところでは、「世を超えた真実に触れた」、あるいは「仏様の世界に生かされている」、そういう感動を持つたということです。これが大切。これが一心帰命のところの眼目になります。これがなければ仏教にならない。

ところがこの後の「ああ、弘誓の強縁、多生にも値いがたく、真実の淨信、億劫にも獲がたし。」ここからは「一心願生」です。「一心願生」というと分かりにくければ、「お念仏の生活」、「念仏生活」とお考えいただいたらいいかと思います。

信心の核心―一心帰命と一心願生（念仏生活）

まずひとつ確認しておきます。親鸞聖人は、浄土真宗という仏教を表すときに、他の仏教と違う特徴として「超世、貧苦、名号」をあげる。これは「三誓偈」に出てきました。これがひとつ。

もうひとつは、浄土真宗の信心には二つの契機がある。契機というのは食べるケーキじゃなくて、特徴的な二つの核心です。ひとつは「一心帰命」と言つて、仏様に帰命する。初めて仏様に帰命する。もうひとつは、その仏様の世界を、今度は「念仏生活」として生きていく。『大経』では「願生」と言います。その他の經典では、『大経』

もそうですけど、「往生」と言つてもいいです。浄土に向かつて生きていきたい、浄土に向かつて生まれていきたい。それがお念仏生活になります。いったん仏様の悟りに触れた人は、今度はそれをもとにして、仏様の浄土の世界に帰って行きたい、そういう念仏生活が始まるわけです。

『大無量寿経』をよく読みますと「一心帰命」を表す部分と「一心願生」を表す部分の二つに分かれます。それを最初に見抜いた方が世親（天親）菩薩です。ですから世親菩薩は「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安楽国」と『大経』の教えを自分の身にいたいて、「仏様に帰命する」という大切な部分と、改めて今度はそれを「生活の中で生きていく」という部分と二つに分かれるのだと言われた。それは『大経』にそう説かれているからです。

世親菩薩は「願生偈」を説いた時に、「願生偈」と言うのは『大経』の教えを読んで、そして菩薩ですから『大経』の悟りをこの身にいただいて感動して詩にしたものです。その時に、まず最初に、「私は仏様、尽十方無碍光如来に帰命するのだ」と表明するわけです。その次に、「その仏様の浄土に生まれていきたい」と表明するのです。それも勝手に世親菩薩が言っているのではなくて、『大経』にそう書かれているからなのです。ですから世親菩薩が言うように『大経』には「一心帰命」という場面と「一心願生」という場面と二つあると。まずこう考えてください。

ですから『教行信証』を読んでいくときに、親鸞聖人が浄土真宗を表明する時に「超世・凡夫の救い・名号」と「三誓偈」によってその特徴を言う場合と、『大経』の「一心帰命」と「一心願生」というふ

うに二つに分けて言う場合と、この二通りあるということを知つていてください。

ところがここは「総序」ですから、その二つのことはひとつとして書かれている。ここに「総序」という大切な意味があるわけです。『教行信証』全体を包んでいるのだから、だから一心帰命と。「一心帰命」というのは『教行信証』で言えば、「行の巻」、「信の巻」や。行信やね。

そして、「一心願生」ということになる、これは「証の巻」。その全体を包んで「三誓偈」によつて前半は真宗の特徴をいう「帰命」ということを表す。その帰命と同時に、後半は実は「願生」という念仏生活を表すのですよというふうに、親鸞聖人は、これも『大経』によつて、そんなふうに書かれているということをよく知つておいてください。

親鸞聖人の勝手なご領解ではありません。これは世親菩薩のご領解を受けて、よく『大経』を読めばそうなっている。その通りやと言つて、親鸞聖人は前半が「一心帰命」、後半は「願生浄土」。こう言うふうに分かれている。そして「一心願命」の時の眼目は、「悟りを覚つた」と言つてもいいような感動をいただいた。

ところが念仏生活と言うのは、その悟りが続かんのよ。仏様の悟りに触れたという感動を持つたんだけど、気が付いてみたら金の計算ばかりして生きとる。人の悪口しか言わん。そして何とか自分を立てたいという根性が抜けん。これは僕が言うとるんじゃないよ、經典に書いてる(笑)。經典の通り言うとる。そして喧嘩ばかりして傷つけ合つて、本当は仏教が大切なのに、どこ吹く風になつてしまう。そういう念仏生活、そこに今度はどういう意味があるか

という事を説いていくのが『大経』なのです。

いいですかね、ですから「一心帰命」、「一心願生」、こういう二つで真宗を表す場合と、「超世、凡夫、名号」、この「三誓偈」の三つで表す場合と二つあるということを知つておいてください。どちらも『大経』の通りにおつしやつてゐる。ということを知つておいてください。親鸞聖人が勝手なことを言うとするんじゃないということなのです。

ちよつとそれでは休憩しましょうか。(休憩)

《二席》

それではもうしばらくお話をさせていただきます。

総序(後半)

後半のところになります。短いですが、もう一度後半だけ読んでみましょうね。

「ああ、弘誓の強縁、多生にも値いがたく、真実の浄信、億劫にも獲がたし。たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ。もしまたこのたび疑網に覆蔽せられば、かえつてまた曠劫を径歴せん。誠なるかなや、撰取不捨の真言、超世希有の正法、聞思して遅慮することなかれ。ここに愚禿釈の親鸞、慶ばしいかな、西蕃・月支の聖典、東夏・日域の師釈、遇いがたくして今遇うことを得たり。聞きがたくしてすでに聞くことを知りぬ。真宗の教行証を敬信して、特に如来の恩徳の深きことを知りぬ。ここをもつて、聞くとることを慶び、獲るところを嘆ずるなりと。」

はい、これだけです。後半の方は少し短いと思いますが、

「ああ、弘誓の強縁は」、まあ感嘆詞というか、こういう言葉遣いは珍しいです。ここしかありません。ですから親鸞聖人は、自分のこの言葉でも分かるように、感動と言うか、感情と言うか、仏教に遇った感動を述べています。「思ってみると広くて深い本願の誓いは私のような者がどれだけ生まれ変わっても遇うことができなかった教えである」。そして

「**真実の浄信は億劫にも獲がたし**」と、こういうのですから、「真実の他力の信心なんていうのは、何億年生きたとしても獲ることができない」。これが親鸞聖人の実感なんです。本願の教えに遇った方の正直な告白なのです。私のような者が本願の強いご縁、

「強縁」とありますから、どれだけ逃げても放さないよと言って仏様の方が追っかけてくださる、そういう強い縁に、私のような者はどれだけ人生を重ねても遇うことはできなかった。そして真実の他力の信心なんていうのは、何億年生きたとしても

「**獲がたし**」。かたいという字はね、「**叵**」、こういう字ですね。これは possible の「可」をひっくり返した字です。ですからこれは不可能という意味です。私のような者が絶対に遇うことができなかった、そういう教えに私は遇うたのだと。これが裏にありますけれどもね。

その前に一心帰命のところでは、

「**円融至徳の嘉号は、悪を転じて徳を成す正智、難信金剛の信樂は、疑いを除き証を獲しむる真理なりと。**」とあって、その次です。

「しかれば、**凡小修し易き真教、愚鈍往き易き捷徑なり**」、私のような凡夫が修めやすい教えであり、そして私のような愚鈍の者が往き易い道だと、こう書かれているわけです。ですから、法という視点から言えば、凡夫に帰って、私たちの分別が届かないようなさうい

う世界に目を開いていくわけです。

往き易い道

たくさん今日はお来しいたできて、出来がいい方も悪い方もいらつしやると思うけど(笑)、いやそれがおるのよ、また出来のいい人が。僕はほんと出来が悪いんだ。もう出来のいい人がおるんだ。まあ前に座っておるから言いにくいけど、田畑先生なんてやつぱり、何というか、人徳があるうが。

寺川俊昭先生もそうだった。人の悪口を言ったこともないし、それから人を非難したこともないし、怒ったこともない。僕は寺川先生と五十年ぐらいおりましたけど、一度も怒られたことがない。たいていひどいことしましたよ。もうほんと馬鹿じゃないかということをしたけど、怒られたことがなかった。やつぱり何というか、広やかで、おおらかだね。僕はすぐ、蛍光灯みたいにカッと頭にきて腹立つて怒る。うちの奥さんとよく言うんですけど、「多分私は人間に生まれてきてまだ日が浅いと(笑)。初めて人間に生まれたのかもしれない、昔はひよつとしたらサルやったかもしれない。あの偉い人たちはなあ、もう何遍も生まれ変わつとるぞ、人間に、十遍ぐらい」、と冗談を言うんだけど、それぐらいやつぱり出来のいい人もおるし、悪い人もおる。けどね、凡夫は凡夫やね。

「凡夫」というのは分かりますね。自分を立てたいという気持ちが抜けない、経典に書いてある通り。食うことに一生懸命走りまくって、そして年を取ってしまうと書いてある。凡夫でない人は一人もいない。これが善導大師の人間を見る目です。九品ある上品上生から下品下生まで、出来のいい人から悪い人までおるけど、凡夫でない人

は一人もいない。だから必ず凡夫に帰って仏教に遇える。さつき言ったようにね。

どんな人も必ず凡夫に帰れば本当の仏教に遇えるのだから、だからだれもが必ず仏になる。往き易い、ここにあるように修し易い、それから往き易い道である。真宗という仏教はそういう仏教なのだというふうに書かれている。

遇いがたし、獲がたし

ところが今度は一転、仏教に遇ったという感動を親鸞聖人がここで述べる時には、「自分のような者は絶対に仏教に遇うことができなかった者である、他力の信心なんていうものは、何億年生きても不可能であった、それが分かった」と。機の方から言えば、「遇いがたし、他力の信心なんていうのは獲ることができない」と。こんなふうに書かれていきます。

皆さんどうですか、仏教の教えに出遇ってみれば、かえって「自分のような者が仏教に遇う者ではなかったのだ、恥ずかしい」と。これが念仏生活が始まる最初です。

仏教の教えにさえ遇ってなければね、何かこう欲にからんで、澆刺と生きれそうな気がします。僕はそう思ったことがあるんです。ああ親鸞聖人の教えに遇ってなければ、何かもうちよつと、一生懸命に会社かなんかに勤めて、ベントツかなんかに乗って、ブイブイ言うて・・・、それが恥ずかしいと思うようになる。それが念仏生活の出発点なわけですよ。どうでしょうか、分かりますかね。

せつかく仏様の教えの中にあるという感動をいただいたのにな、今度は我に帰って、南無阿弥陀仏という念仏の生活のところに戻ってみると、何も誇るものはない、自分のようなものが何で仏教に遇

うたんやろうか。それは先生のお育てによる、これに尽きる。もうちよつと言えば、本願が、私たちが凡夫と気づく前からかけられていた。だから仏様の方が凡夫ということを見抜いて、先に仏様の方から追っかけて来てくださつとる。捨てないと言って追っかけて来てくださつとる。

仏かねてしるしめして

『歎異抄』の九章にあるでしょう。「仏かねてしるしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときわれらがためなりけり」。仏教に遇った時に初めて凡夫だということ知らされたけれども、そんなことよりも、ずっと仏様の方が五劫の昔から、凡夫と見抜いてくださつて本願をたててくださつて、本願に目覚めよと言って、仏様の方から捨てないと言ってくださっていた。「仏かねてしるしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば」。どんなに昔の人が仏教に触れても、「仏かねて」です。どんなに人類が始まった頃の人間が本願に出遇っても「仏かねて」です。ですから仏様は、私たちがかねて昔から、過去よりも過去に遡って、凡夫と見抜いて、念仏しか救われる道はないと言って、仏様の方が縁を作ってくださいしているのです。

私たちの方から言えば、仏教に遇うたことは偶然遇うたとか思えない。けども仏様の方から言えば、それは必然なんだと。だから「宿縁」と言うのはそういう意味です。昔から仏様の方が縁を持ってくださっていた。そういうところに他力の仏教に触れた大変大事な意味があるんじゃないでしょうか。「私に分かった」と言いたいところです。けども私には分かる能力なんてどこにもない。ただ私をお育てくださつた先生によるんだと。しかしもう少し言えば、今申しあ

げたように、過去よりも過去から仏様が本願をたてて、「煩惱具足の凡夫」と見抜いて、「念仏しか助かる道はない」と、もう言ってくれさつておつた。今初めて念仏の教えに遇うて、凡夫と分かつたけど、私に分かるよりも過去から仏様が縁を結んでくださっていた。それが「遠く宿縁を慶べ」という言葉になりますね。

日本人の血の中に仏教が流れている

『大経』でいいますと、「三毒五悪段」というところがありますが、ここに私たちの念仏生活の姿が実にリアルというか、いやらしいほどリアルにお釈迦様が説いてくださっています。仏教に触れると、もうちよつと立派な者になってもよさそうなのだと思いますけども、かえつて自分の身の愚かなことを知らされていくんだ、ということから始まるのが「念仏生活」なんです。

先ほどのお話の続きなのですが、この間、一昨日か、NHKのプロデューサーが来てお話をしたときに、あなた方は若いから仏教を知らないかもしれないけども、日本は明治まで仏教国だったのよ。天皇だつて当たり前やね、聖徳太子の流れですから、天皇だつて仏教の御前講義を聞いていたんですからね。明治になつてから、ああいうふうになつて、そして神道にさせられて、そしてアメリカナイズされた教育が入つて来た。アメリカナイズされた教育の象徴が大統領選挙運動のトランプとバイデンみたいなものです。ののしり合っているだけじゃないですか、あれ(笑)。なさけないというか恥ずかしいというかね、恥を知らないわけですよ。

あなたたち若いから、分からんかもしれないけども、日本人の血の中に仏教が流れているのよと、この間言ううとつたんですよ。例えば、震災の時にネットを見ると、世界中の人たちが日本人は偉いと、若

い人が年寄りの人の手を引いて、踏みつけたりしないように、順番に一生懸命避難しとると。それから、ああいうことが起こると世界中で必ず起こるのは、コンビニを叩き壊して、そして中の物を盗んでいく。日本人は全然そういうことをしないと云つて、絶賛されてましたよ。世界中からね。

僕はその時に、ネットを見てうちの娘に言つたのです。娘は仏教の勉強をしているわけではない、長女は英文科の卒業ですから、仏教を勉強しているわけではないけど、「おいネットにこんなことを書かれていますぞ、みんなえらい褒めてるぞ」と言つたら、娘が「そんな、津波でみんな家を流されて、みんなつらい思いをしている時に、コンビニなんてぶち壊して中の物を盗るなんて、そんな恥ずかしいこと、私できへんわ」と言つたのですよ。それは正直な実感ですよ。それそれ、恥ずかしいと思うこと。それが宗教の持つている大事な役目なのです。

人間として欲に駆られて、叩き割つて盗つていく、「そんな恥ずかしいことできないわつてうちの娘が言つたのよ。君どう思う」と言つたら、そのプロデューサーは「私もそう思います」と。そう思う、それは自分を見る鏡を持っているということです。自分を見る鏡を持つてたわけです、昔の日本人は、ちゃんとね。そしてみんなが苦しんでいる時に、自分だけいい、そんな恥ずかしいことができるかと言つて、ずうつとそれが受け継がれて来て、もう仏教が無くなつても、若い人の血にやつぱり流れているのです。「あなたもそう思う?」と言つたら「そうです」と。それが仏教国の証拠なのです。

仏教に触れてたからね、昔の人はみんなそれを受け伝えて、今は文化として伝えているかもしれないけども、君は分かつていないかもしれないけど、それが仏教国だったという証拠なのよと言つたら、「は

あ・・」と言っていた。そうでしょう、そうなんです。だから宗教というものの一番大きなはたらきは自分の姿をちゃんと見せてくれる、鏡のように見せてくれる。それが仏教に触れた証拠です。まるでトランプやバイデンのように、まあ人のことはいいけど、まあ日本人はああいうことがないわけですよ。それは千年以上仏教国だった証拠です。

念仏生活―身の愚かさを思い知らされていく

そんなふうに仏教に遇うと、人間として生まれてきたことが嬉しい、人と比べる必要がないほど自分のいのちの尊貴さに目覚めて、比べる必要がないのだという感動は持つ。持つけれども、ふっと自分を振り返ってみると、それに値しないような生き方をして来ている。恥ずかしいと言って頭を下げるしかない。親鸞聖人はそこから始まっている、念仏生活が。実に正直というか嘘がないでしょう。

それは親鸞聖人が、自分の感動を述べてるんじゃない、まあ言いつつ切れない、もう一杯ある。聖典の八十七ページ、これは『大経』の下巻の終わるところです。『大経』を説き終わって、そして弥勒菩薩にこの『大経』を付属するところです。

「仏、弥勒に語りたまわく、「如来の興世、値い難く見たてまつり難し。諸仏の経道、得難く聞き難し。菩薩の勝法、諸波羅蜜、聞くことを得ることまた難し。善知識に遇い、法を聞きて能く行ずること、これもまた難しとす。もしこの経を聞きて信樂受持すること、難きが中に難し、これに過ぎて難きことなし。」

『大経』にそう書かれている。それで終わっている。

本当に凡夫に帰って、仏様の世界に触れてみれば、いかに『大経』

の教えに遇い難かったかということ、逆に言えば、自分の身がどれだけ愚かな身を生きているかということをお思い知らされていく。それが「三毒五悪段」のところにならずうつと説かれていきます。本当は「三毒五悪段」を読むといいんですが、言葉が難しいからね、けど生々しいことが説かれている。これが本当に仏教に遇った人のことだろうかと言うほど生々しいことが説かれています。

三毒五悪段

指摘だけしておきましょうね。「三毒五悪段」は『大経』の下巻の五十七ページのところになります。真ん中へんに九十という番号がありますでしょ。ここから「三毒五悪段」が始まっていきます。大変大事なんです、まあこれを解説しているとすぐに時間が来ちゃうから、お釈迦様が弥勒菩薩に、

「宣しくおのおの勤めて精進して、努力自ら（ゆめゆめみずから）これを求むべし。」

お念仏をして、本願によって浄土に生まれるということをお求めなさい。そうすれば必ず、この世の苦しみを超え、絶して、この苦しみにから去ることを得て、阿弥陀の安養国に往生することができます。往生しなさい。横さまに本願によって、地獄・餓鬼・畜生という五悪を超えて、人間の悪が自然に本願によって閉じ、そして仏様の世界に生まれていきたい、昇つていくことは窮極がない、行き易くして、ここにちゃんとあるでしょう、「行き易い」。出て来るでしょう。ただ、「行き易くして」はいいんだけど、「人なし」。行き易いんだけど、本当にそれを往く人はない。難しいということ。そして

「その国逆遺せず。自然の牽くところなり。」逆らわずに、本願のはたらきによって、浄土に生まれていく者になれ、こう言って「三毒

五悪段」の前に教戒するわけです。ですから、要するに仏教に触れたのだから、念仏を称えて、そして本願の教えをよく聞きながら、その本願によつて浄土に生まれていく者になりなさい。念仏しなさい、聞法しなさい、こう勧めるわけです。

ところがその次のページ、そこから貪欲が始まりますけども、

「然るに世人」、にもかかわらず世の中の人は、

「薄俗にして共に不急の事を諍う。」 軽薄で、俗っぽくて、みんな急がなくてもいいことばかりを諍い合っている。こう始まるんです。

「この劇悪極苦の中において」 この娑婆の苦しみに中であつて、

「身の営務を勤めて」 自分の身だけがかわいいから、自分の身を養うということばかりに力を尽くして、

「もつて自ら給済す。」自分を自分で一生懸命養つていこうとする。

「尊もなく卑もなし。貧もなく富もなし。少長男女共に錢財を憂

う。」 尊い人とか卑しい人とか、それから貧しい人か富んだ人とか年長とか男女とか、そういうことはなくて、全部金や、と言つて苦しんでいる。

「有無同然なり。」 今言つたように、世の中の人はどんな人も、みんな同じように金やと言つて苦しんでいる。

「憂思適に等し。」 苦しみはどんな人も、それによつて苦しんでいる。

「屏営愁苦して、」 うろたえ、憂え、苦しんで、

「念を累ね慮りを積みて、心のために走せ使いて、安き時あることなし」 そういう食うことばかりに思いを重ねて、そしてそれを積み重ねて、一生それに使われて走つて回つて、安心の時はひとつもない。こう言われると嫌と言えんでしょう。そうしてこの後ずうつ

と続くわけです。長いですがここは、嫌というほど。この後は、

「田あれば田を憂う。宅あれば宅を憂う。牛馬六畜・奴婢・錢財・衣食・什物、また共にこれを憂う。」 有る人は有ることで苦しむ。これは僕はよう分からんけど、有る人は有ることで苦しむ。その次に、

「横に（よこさまに）」 というのは急に、水害が起こつたり、火事が起こつて燃えるんじゃないかと思つて苦しむ。あるいは盗賊が来て取られるんじゃないか、あるいは敵、あるいは金を貸せと言つて来る人たち。そういう人たちによつて焼かれるような苦しみ、そして強奪されるんじゃないかというふうな苦しみ。それが心の底からどくどくと湧き上がつて来て、いつまでたつてもそれを心配して生きていかなければならない。

「憤りを心中に結びて憂悩を離れず。心堅く意固く、適に縦捨することなし。あるいは摧碎に坐して、身亡び寿終われれば、これを棄捐して去りぬ。誰も随う者なし」 もしも水害によつて流されて命が終つたとなれば、今まで築いてきたことは全部ゼロになる。妻も子供も連れていけない、全部ゼロになる。命終つたからと言つて、誰もついて来る者はいない。

「尊貴豪富もまたこの患えあり」にもかかわらず、生きている時には、それに振り回されて、生涯それで苦しんでいく。

そんな愚かなことをして行くくらいなら、本願の念仏を生きる者になりなさいと言つて、何度もお釈迦様は、ここは、教戒、教え戒めていくところです。ここが長いです。だから本当はここをずうつと長く読んでいくと、その通りだなあとというふうに思います。

浄土莊嚴―私たちの生活を全部照らす

ああもうあまり時間が無い。ともかく申し上げたいことは、「一心15

「帰命」のところでは仏様の世界に触れて解放されたという感動を持つたとしても、そこから始まる念仏生活は、かえって自分の身を照らし出されて、そして、今言ったように、愚かという点をいっぱい知らされていく。百八の煩惱があると言われますが、百八通り知らされていくと言ってもいいかもしれない。その時に、そういう私たちの煩惱の身を越えなさい、超えて生きなさいという浄土、娑婆を越えて生きたい、そして仏様の世界に帰って行きたいという、その浄土ということが改めて念仏生活の中で問題になって来ます。

「一心帰命」の時には、仏様の一如の悟りに解放された。これが大切。だけど「念仏生活」の時には、浄土ということが、今度は私たちの生活を全部照らししていく。いつまでそんなことをやっているのか、もう言わなくてもわかりますね。

浄土の莊嚴というのは二十九種莊嚴として世親菩薩は説いているけども、その浄土の莊嚴は全部私たちの在り方を照らして、それをひっくり返す世界があるから、そこに生まれて来いと言って、浄土に生まれていくものに私たちがさせられていく。煩惱の身を持つてから、なおさら、煩惱の身がなければ、それで悟ってしまうのだけれども、煩惱の身を持つているから、いのち終わるまで、仏様の世界に帰りたい、そういうふうには娑婆から浄土に生まれていきたいという念仏生活、これがとつても大事になります。

皆さんどういふ念仏生活をしておられますか。真宗はどんな生活をしたらいいかというところが、生活規範がもう分からなくなっている。だから、まあ言ってみれば、朝夕お内仏に手を合わせて南無阿彌陀を言いましょうね、ぐらいしか言わんやろう。それからまあ、ご飯を食べる時に、「いただきます」の代わりに、「食前の言葉」、「食後の言葉」を唱えましょうね、ぐらいしか言わない。しかしこの「三

毒五悪段」をよく読んでみると、ちゃんと念仏生活の規範があります。守るべき規範、それがなかったら宗教にならんよ。

だつてよく考えてごらん、こんな好き勝手なことをしするのは日本人だけや。インドに行けば、食べられないものがたくさんあるよ。牛を食べたらあかんよ、神さまやから。道歩いとつても牛の方が偉いから、車はじいつと後ろをついて回つて。だから牛の方が偉いよ。食べたらいけない。イスラムでもそうでしょ。必ず礼拝するじゃないですか、決まった時間にね。すごいんですよ。

小川一乗先生と寺川俊昭先生は、うちに来られて、よく一緒にお酒を飲みながら、必ずなるのはインドの話なんです。みんなインドが好きだから。そうしたらうちの奥さんが言うのですよ、「もうインドの汚い自慢ばかりしている」と。汚い自慢と危ない自慢ばっかり。

小川先生が面白いことを言っていました。国内線のプロペラ機に乗ったら、操縦士と副操縦士と二人おるのやけど、その二人が途中で出てきて、そして絨毯敷いて「アッラー」言うて拝みだしたということです。「大丈夫か、おい」言うて…(笑)。ちゃんとその時間になったら礼拝するんですよ。トルコに行つてごらんさい、「アッラーア」言うて、何か時間になると「ワーワー」言うて、スピーカーから流れるんですよ。そしたらみんな「ワー」と礼拝でするでしょう。

皆さんどうですかね。念仏をたまにするくらいかなというようなもので…。

念仏生活の生活規範

生活規範、質素にしない、華美にするな、それがちゃんとあるんです。そういうことがもう分からなくなっちゃった。だから昔から報恩講は精進でした、最近それが壊れて来て、もうわけ分からんようになってる。だけど、やつぱりちゃんと精進でしたよ。

「少欲知足」これを守りなさい、念仏生活はね。それから

「和顔愛語」お互いに助け合って生きていきなさい。「三毒五悪段」読むとちゃんと書いてある。人間はいつも喧嘩する、怒りのところにそう書いとる。ちよつとしたもめごとで喧嘩になる。喧嘩になるとどんどん腹が立って、もう抑えられんようになってくる。そして自分が死ぬときに息子に遺言する。「あそこの家とは付き合うな」と（笑）。そうすると息子はまた、「つき合ったらあかん、あいつは」と、どんどん大きくなって、そして喧嘩が絶えなくて戦争になる。そうじゃなくて、「和顔愛語」。お互いに、にこやかな顔をして、そしてお互いに助け合っていきなさい。それから

「恭敬三宝」念仏しなさい。念仏によつて越えて行きなさい。

人間の努力は、やつぱり自分を立てたいということに変わるから、本願に立ち返って、念仏して、そして、みんな平等なのだと言つて、にこやかな顔をして生きていきなさいと。それが生活規範としてずっと説かれていきます。

はずかしいという気持ち

願生浄土が念仏生活の規範です。本願の促しによつて生きていきなさいと。ただね、実際の生活は、正直に言うとうそはいかないのです。

だけでも、いいですか、ここが大事です。

実際の生活は身を持つているから、いつも食うことに追われていく。しかし、いったん仏教に触れた人は、それを恥ずかしいと思うて、仏様の世界に帰って行きたいという意欲を持つている。

念仏生活の中で、途中であきらめる人がいる。「もう俺は分からんでもいい。こんなもん分かる人は少ないんやから、もう俺なんか分からんでもいい」と言つてあきらめる人がいる。「あきらめたら、地獄に落ちるよりも悪い」と書かれている。「五百年、仏様に会えない」と書いてる。なぜかわかりますか。あきらめると自分のいのちの底からの、「こんな自分は恥ずかしい」とか、「こんな自分はいやだ」という心に蓋をするからです。実はそれこそが仏様の心なのに、それを蓋して、居直つてしまう。そうしたら、それは「地獄に落ちるよりも悪い」と、もう二度と「五百年経つても仏教に遇えない」と書いてある。これは僕が言っているのではない、ちゃんと書いてある。

だから、この恥ずかしいと思う気持ち、これが大事です。

皆さん僕よりもだいたい年上の方がいっぱいいらっしゃるでしょう。人間に一生続いていく気持ちなんてめつたになかろうが。「あなたのことを一生大事にします」と言うて結婚するけど今はすぐ離婚する。あれだけ思つたのに、一生続く気持ちなんて人間にはない。ところが、なぜか生まれたときから、なんか、「もつとちゃんと立派にならなあかんのとちがうやろか」とか、「もつと頑張らなあかんのちがうやろか」とかいう心がある。その心は子供の時には向上心として、頑張りなさい、学校で頑張つて、いい成績取つて、「向上心」と

してはたらく。けども、その心でかえって傷ついていく人もおる。そしてそれはずうつと続いていく、その心は実は、仏教を求めている心なんですよ、ということをお親鸞聖人は比叡山に行つて初めて分かつたのです。

そうなんです。娑婆の中で「父親はおらん、母親もおらんようになつた。なんで俺だけこんな目に遭わなあかんねん。みんな出世していくのに、俺だけなんでこんな目に遭わなあかんねん」と言つて、多分泣いたと思う。だけどそれは実は、「仏教に遇いたいという、仏教を求めている心なんですよ」ということを教えられて、ああそうだが、「仏教でその心を満たしたい」、きつとそう思うたでしょうね。ですから、私たちの日頃の、何か「負けたくない」とか、そういう世間を生きる心の中に、宗教心というものはあるのよ。それが実は「仏様に遇いたい」という心なんですよということをお教えられて、私たちは仏教に向かつて来た。

ところが仏教に触れたとしても、まだその心(向上心)が抜けなくて「ああ私はだめだ、もうちょつと立派にならないと仏様の世界になんか行けない」とやつぱり悩んでいく。それ、死ぬまで多分続くと思うよ。でも、よう考えたら、それ、人間の心じゃない。

あんまりこれ以上解説したらあかんのや。

自分で分からないと……。

生死即涅槃―願生浄土という生活

だけど、苦しんで苦しんで「なんで、こんなやろう」と言つて涙を流して、やつぱり苦しむ人がおるでしょう。その時に、「はあ、自分を超えた心が、自分を恥ずかしいと思わしてくれていたのだ」と

いうことが「分かる時」が来る。その時に

「煩惱の身があればこそ、仏様の本願がたのもしい」とわかる。

「身は凡夫だから恥ずかしい話だけど、この私のいのちの中に流れている仏様の住持力、本願力、それは何物にも代えることができない」とわかる。

「凡夫のままでもいい」と言つて、改めて「浄土に生まれていく者になりたい」と願う。

こういうふうには、煩惱の身だから、かえって、私たちが求める世界を明らかにしてくださいと、私たちが恥ずかしいということをお教えながら、しかし、恥ずかしい事を超えて生きたいという心があるでしょう、と書いています。

超えて生きたいという心、それが大事なんだと。

そこに煩惱の身の生死(これは迷いと言はんやけどね)、生死即、仏様の涅槃のはたらきが念仏生活の中に生きているということをお親鸞聖人は「三願転入」というところで証明していくことになります。それは今度、『教行信証』の中に入って、改めてお話しします。

今のところは大事なところなのよ。

「生死即涅槃」と言うのは大乘仏教の悟りの名前なのです。

ところが今言ったように私たちは煩惱の身を持つていているけど、その煩惱の身を捨てないで、ずっと本願がはたらき続けてる。その本

願のはたらき、それに頭をさげて浄土に生まれていく者になりましょうと言つて、生死即涅槃を信心のところて実現していくというのが浄土真宗の信心、願生浄土という生活なんです、ということが説かれているところが後半になります。ですから後半になると自分の身の痛み、それから懺悔、それが説かれていきます。

そして最後は、もう時間が無くなつたけれども、最後はインド、それから西域、中国、日本の祖師たちが、『大経』の教えを身をもつて生きた祖師たちがいらつしやる。だから『大経』と同時に、七祖の方々が明らかにしてくださつた、その教・行・証、教えと実践と悟り、それを私はただ敬つて信じると書いています。「敬信して」と。だから私は教行証、お釈迦様と七祖が頭かになしてくださつた教行証を信じるという立場から、『教行信証』を頭かになしていきたい。そして如来の方から、凡夫を救つてくださるといふ、仏様の方の大悲に感謝するんだということを述べられて、この「総序」は終わつていくこととなります。

ですからこれから先、『大経』と七祖の引文、それによつて『教行信証』は展開していくこととなります。最後ちよつと急いじやつたけれども、まあ、中に入つていけば、少しずつ皆さんと一緒に勉強していけば分かることだと思ひます。一応「総序」は今日で終わりたい。五年計画ですので、一応今日で終わりたいと思ひます。

《質疑》

(質問一)「総序」の中に「遠く宿縁を慶べ」という言葉があつて、これは自分の中でも、この言葉で涙を流したこともあるんですけど・・・だけでも五百年見放されると言われていたように、中々それが難しいというか、自分に甘い。「そうは言つても仏さんは助けてくれるだろう」とか、「こうやつて延塚先生の勉強会には足を向け、そこで法話を聞く」、そんないろいろ言い訳をしたりして、日常の中ですぐに自分に甘くなる。この場ももちろん大事なのですが、また、日常こそがまた大事なのかなと思つたのです。そんな中で「遠く宿縁を慶べ」というところも、関わつてくるのかなと思つたりもします。その辺についてお話をいただきたいなと思ひます。

(先生) はい、念仏生活の中で、中々自分を律していけない、いつも自分に甘くて、だからだらとした生活を送つてしまふ・・・。

仏様の教えに遇い、一心帰命して悟りの世界にあるのだという感動はあつた、というのがひとつね。ところが「三願転入」という親鸞聖人の信仰告白をみますと、二十願の機、つまり君が言うように、いつまでたつても自分を許していつて、そして「まあ、聞法しているからいいだろう」とか、「念仏しているからいいだろう」とか、もうちよつと言つと、今度は、念仏を逆手にとつて「お前は仏教を勉強していないからだめだ」とか言つて、仏教を自分の手柄にして自分をたてていくことさえ起こつてくる。そういう事が起こる。

昔、聞法をしていたばあちゃんたちの中にいたでしょう。昔から聞法をしている中々偉いばあちゃんやと言われる人に限つて「うち

の嫁はひとつも仏教を聞かん、つまらん」と言つて怒る。怒ると、それは正しいのだけれども、みんなに嫌な感じをあたえて、気が付いたら孤立していくということが起こる。せつかく仏教によつて自我を超えたという感動を持ったのに、仏教を逆手にとつて、今度は、自分の自我を主張していくということになつてしまふというのが、人間の根性の汚さです。

それを二十願の機、植諸徳本といいます。植諸というのは、植える、諸々の徳本、徳本と言うのは、これは仏になるといふことです。自分が仏になるといふことを自分の手柄に置き換える。言つていふことは分かれますね。せつかく聞いた仏教まで、自分の手柄に置き換えて、そして自分もなんとなく自分を立てたい、そして仏になることさえ自分で決めていこうという奢つた根性です。仏に成るかならないかは仏様が決めることです。それを自分で仏になろうと決めようとするというのは、仏様の仕事を盗んでいる。だからいつも苦しい、本人も。だけど真面目で私は立派なのですよと言いたいから、そこから逃れることができない。それが親鸞聖人の一番の最後に残つた、ぎりぎりの問題でした。せつかく触れた仏教を自分の手柄にする。それが親鸞聖人の最後に残つた問題でした。それを始めて気がつくというような出来事がやつぱりあると思います。

「三願転入」にはちゃんと植諸徳本に目覚めたのだということが書かれていふから、親鸞聖人の行実で申しますと、親鸞聖人は皆さんご存知のように、四十歳まで越後で流罪になつていましたね。そして流罪になつて、流罪が許されて、これから『教行信証』を書きたい、あるいはどう思われたか知らないが、教化したいと思われたのかも知れないが、越後から関東に移住して行きますね。その途中に飢饉に遭うわけです。たくさんの人が死んでいくのです。その飢饉に

遭つたときに、思はず親鸞聖人は三部経を千部読むという行に励んだというわけです。

ところが何日も寝ずにそれをやつている途中に、ふつと、ああ、あの時仏様の世界に触れて、自力は無効だとはつきり知らされたはずなのに、まだ自力の根性が起こつて、三部経を読んで人を助けたいというようなことを思うと。なんという自分のこの自力の根性が抜けないのだろうか、初めてその時に親鸞聖人はこの二十願ということが、私たちの身の事実なのだということを知られる。そういう出来事がやつぱりあると思います。

だから死んでいくのではなくて、どこかで「ああ俺は本当に駄目なんだと、仏教まで自分の手柄にしたいという根性が抜けないのだ」ということが、もう一度「分かり」としてある。それが分かつたからと言つて、死ぬまで抜けましたということにはならん。それを何度も繰り返すから。

今度は、親鸞聖人が五十歳を過ぎたときに、インフルエンザに罹つて熱でうなされて、「ウー」と言つてうなる。一週間うなつて寝ていたのです。これは恵信尼が伝えている。

その時に親鸞聖人の頭の中に『大経』の字が一字一句全部出て来たというのです。そしてそれを夢の中で称えたというのです。その時に「はて、これはなんだ」と思うと、ああ若い時にあの佐貫で三部経を読誦していた、あの自力の心がまだ抜けてなくて、夢にまで『大経』を読んでいる。私はまあ何と恥ずかしいことだと言つて、それが死ぬまで続いていく。けどもどこかで「二十願の機なのだ」ということがはつきり分かる」といふ時があると思います。

だからあなたも聞法をして、どうにもならんということが身に沁みてはつきりする。そうしたら謙虚になる。仏法に遇うたと言つ

て自慢しなくてもよくなるし、自分の力で遇うたわけではない「遠く宿縁を慶べ」。ともかく本願のはたらき以外にない、だから自分のような二十願の身をもつ者が仏法なんかに遇えないのだけど、仏様の方からずうつと追っかけて来てくださつとつた。その宿縁を慶ぶ以外にないと言つて、徹底的に凡夫になりきつていくことができる。

そこに逆に言えば、「仏様の宿縁を慶べ」と本願を仰いで喜んでいくことができるということがあるのだと思います。どこかでやはりそういう分かりがなければ、「十九願から二十願に展開した」とは言わないと思う。おっしゃっている以上は、やっぱり「そうだ」ということがどこかであつたのだと思うから、いつまでも自分を許していかないで、許してないでと言うが、自分では自分を許す、だけど、あなたのいのちの底から「だめだ」と言っている声が聞こえているから、それを大事にして聞法をしていったらどうですか。今はそれくらいしか言えないかな。

(質問二) 私の自宅でこの十年延塚先生を招いて二十七回勉強会をしているのですが、先生から一心帰命と一心願生という言葉を三年くらい前に『論註』の勉強会の時に初めて聞きました。それ以来先生が何度も言われているので、私も一心帰命と一心願生が、区別して考えないといけない、別なものだというのは分かつたような気がしています。ですが、先生のお話を聞いていたら、先生のような専門家の間では、一心帰命と一心願生というのは確固たる定義があるのだろうと思わされる時があります。先生はその定義をみんなが分かつているように当たり前におっしゃるのですが、僕は分かつたような気がしてるけど、本当には半分ぐらいしか分かつていないような気がします。先生、私の疑問がそれですべて解決するわけではな

いですが、一心帰命と一心願生の違いを、さつきも三願転入とおっしゃいましたが、十九願、二十願、十八願に当てはめてちよつと別の視点で説明していただけませんか。

(先生) 君のその質問がよく分からないのですが、一心帰命という場合、あえてそれに当てはめて言えば「自力を棄てて他力に帰す」「雑行を棄てて本願に帰す」これが一心帰命です。そういう意味から言えば、十九願から十八願に帰依する。こう考えてもいいです。

しかし、念仏生活の中で、単に自力と言つても反省を越えた自力がある。仏法を聞いているつもりが自力になっている。念仏を称えなくてはならないという根性が自力です。人間は反省できないような深い自力がある。それを二十願と言います。ですから生活の中で人間には反省できないような深い自力が時々顔を出す。その時に仏様の教えは恐ろしいなと、人間には反省できないような自力まで見抜いて本願を説いてくださつとるんやと言つて感動することがある。

それが三願転入、十九願から二十願に、二十願と十八願とは重なっている。この煩惱の身のまんま、反省できないような深い自力まで十八願が包んで私たちを救ってください。だから二十願の機のまま、機は死ぬまで二十願の機だから、このまんまで十八願を手放して仰ぐというものになっていく。そういう信仰の歩みが三願転入として説かれていて、十九、二十、十八と説かれている。

ただひとつずつ展開していくというのではなくて、いったん自力から他力に帰したものが、念仏生活の中で反省できないような自力を見抜かれて、そしてそのまま十八願の中で救われていくのだというふうに、二十願と十八願とが重なっているのだと。機は二十願、

法は十八願、だから二十願の機と十八願の法が重なっているから、二十願のまんまで救うよという、二十願の本願、果遂の誓いがどれだけ有難いかということをおつしやっています。それが三願転入です。それはまたこれから、必ずどこかでお話をします。

一心帰命と一心願生、帰命の場合は十九願が表向きに問題になります。願生の場合は二十願が重要な課題になります。そんなふうに考えてもいいかもしれません。ともかく一心帰命と一心願生とをこれまでごちやごちやにして考えてきているから、分かることが分からなくなる。願生、念仏生活のところ、「真実の世界があるんだ」なんて言い出したら、わけの分からん話になる。そういう論文ばかりだから、きちつと区別しなさいということを言っているわけです。言っていることは分かるでしょう。答えになっていないかもしれないけど。

大変難しいお話で申し訳ないですね。『教行信証』は初めに申し上げたように、親鸞聖人がきちつと筆をとって書いた。しかもこれは文類ですから、ある種、学問なのです。それを崩して説教にできないわけではないかもしれませんが。しかしそれをやると親鸞聖人に失礼だから、やつぱり、お書きになつてはいる通りに、まずはきちつとお話をして、その上で質問を受けるといふことです。多分、難しい、よく分からんなあとと思うでしょう。そうだと思います。十年聞いてください(笑)。いやいや、ほんとほんと。なんでも十年かかります。

(質問三) 先生いいですか。例えば私たち親から子供に知識とか技術を伝えるのは、子供はゼロから学び直さなくてはいけないではないですか。浄土真宗の場合は、阿弥陀さんが南無阿弥陀仏に込めて智慧といのちを届けたという形で、普通人間で言ったら次の代に

伝えることはできないのですが、南無阿弥陀仏で智慧といのちを届ける、というところは弥陀の誓願不思議としか言いようがないのか、そこらへんのところの味わいみたいなのは何かあるのでしょうか。

先生：田畑先生のおつしやっている通りなのですが、それを今子供が聞いて、中々分りにくいですよ。「ええ？何のこと？」というふうになっちゃうから、だからお釈迦様は『観無量寿経』を説いたのです。人間は生まれたときから、もつと立派な者になりたいという根性をみんな持っている。だから仏教を勉強しなさい、学びなさい。そしてできたなら比叡山に行つて修行をしなさい。必死で求めなさい。求めて、求めて、求め尽くしなさいというふうの説かれています。『観経』ですよ。

ですから念仏が仏様からいただいたものだとこのことを受け取る私たちの方は、さつき言った修行しなくても、人生の中で、この解けない問題に遭う。例えば事故であったり、水害であったり、あるいは家族でもいろんな問題を抱えている。それは私がやろうと思つてなつてはいるのではない。なんでこうなつたかわからないというような問題をみんな抱えている。そういう中でそれを解こうとして、あるいは、それに打ち勝とうとして、みんなもがきますよね。やりなさいと書いてる。やれと。徹底的にやりなさいと。自力が無効になるまでやりなさいということをお説いているのが『観経』です。

ですから子供を甘えて育てたらいけません。徹底的に自分で独立して、独立者としてやりなさいと。それからやつぱり、ちゃんと倫理や道徳、人の世界をちゃんと学んで、それでやりなさいと。その道徳や倫理にぶつかつて苦しむ、それから自分で解けない問題に

遭って苦しむ、それからしか仏教に遇うことはできません。仏様が南無阿弥陀仏をいくら説いていても、それを受け取れないこつちが問題だから、こつちの問題をちゃんとやんなさいと言うことを説いているのが『観経』です。

さつき私が申しあげたように、だれでも人を殺し合うような場面にぶち当たる。そういう中で、仏様の方が救いを準備して、この救われない私の救いが準備されてあるのだということを見せていくのが『観経』の問題だと思います。阿弥陀様の教えが直接人間に伝わらないから、お釈迦様は『観経』、『阿弥陀経』、『大経』と、この三つの経典を説いたのです。

『観経』は十九願の問題です。自力を尽くして頑張りなさいと。そして仏教が分かったという時があるわけです。ところが仏教が分かって、その仏教を手柄にして、今度は何だか人を説教するような態度になっていく。何か自分は偉くなったような態度になっていく。それは我執が法執に変わっただけです。本人は気が付いていない。それまで救うと言うことを含めて説いているのが『大経』の念仏です。受けとる機の、こつち側の問題をはつきりさせるために『観経』と『阿弥陀経』があるのだというふうに思います。

ですから普通の生活感覚から言えば、やっぱり人の世に出ていくときには、倫理と道徳はちゃんと守らないとだめです。今のように入を騙して金を盗る。そんなことは話にならない。自分の子供でも孫でもきちつと倫理観・道徳観を身に付けさせる。そして社会に出ると、それでもつまづくに決まっているから。その時には心配するな、仏教があるから、というくらい教育というものが僕は必要だと思えます。そのためにお釈迦様の大悲は、阿弥陀様の念仏を受け取る私たちのために『観経』、『阿弥陀経』、『大経』、この三つを説い

てくださっている。

三経を説いてくださっているのはお釈迦様の大悲です。それは私たちに『大経』の番号こそ真実だということをお教えるためです。『大経』は最初から念仏ひとつしかないよということをお教えることではないよ。その念仏ひとつしかないよと言うのは、阿弥陀様の大悲、弥陀の大悲です。だから弥陀の大悲と釈迦の大悲、これによって私たちのような凡夫が目を開いていくということになるのではないのでしょうか。

すみません、偉そうに申しあげまして。先生はきつと分かっておられて、僕にしゃべらせてくださったのだと思います（笑）。

追記

田畑先生へ

今日は大変お世話になりました。帰りの車の中で西藤さんに先生の質問の趣旨をお聞きして、私を取り違えてトンチンカンなお答をしたようで、大変失礼しました。

本願の番号は、私のような者にまで伝わったのですから、人間の分別を超えてどんな人にも必ず伝わります。生涯、私のできる限りの力を尽くして、お念仏を伝えていきたいと思えます。伝わるか伝わらないかは、わかりませんが「忍終不悔」です。身は凡夫であつても、いただいた他力の信心は、法蔵菩薩の精神を生きていくことです。あたかも大乘の菩薩のように自利利他の誠を尽くしていくこと、そこに『大経』の信心の特質があります。

曾我先生は、『観経』の撰取不捨の救いは、「救われた」とそこに満足して座り込んでしまう恐れがある。もし本当に救われたのなら、

救った浄土を背負ってそこから立ち上がって法蔵菩薩のごとく生きて往け、それが『大経』の信心であると教えています。

他力の金剛心の内実は、願作仏心（自力）・度衆生心（利他）です。から、信心は法蔵魂を生きることです。それが願生浄土・往生浄土の実際の内容になると思います。ただ菩薩道をあまり強調しすぎると、聖道門の菩薩道と間違えられるために、身は凡夫であることを外さないのだと思われます。しかし、例えば「行巻」の七祖の引用でも龍樹が一番長く引かれます。それは一つには、大乘仏教の初祖である龍樹の所で浄土真宗が完成していたことを証明するためですが、もつと簡単に言えば、真宗は身は凡夫であっても、その信心は龍樹のような大乘菩薩道を生きることだと言っているのだと思われます。

今日は願生浄土の積極性として、その辺には触れなかったのですが、以上のようなことだと思えます。 延塚知道 拜

文責は編集者の田畑正久にあります。